

平成三十年度富山県立大学入学式式辞

平成三十年四月五日(木)
アイザック 小杉文化ホール ラポール

436名の新入生の皆さん、そして、ご家族の皆様、ご入学おめでとうございます。私たち教職員は、心から皆さんのご入学を歓迎いたします。

また、本日は、石井富山県知事、高野富山県議会議長をはじめ多くのご来賓の皆様にも、ご臨席を賜りました。心からお礼を申し上げます。

まず、学部新入生の皆さんにお話しします。

皆さんは、高い競争倍率の入学試験に見事合格され、めでたく本日の入学式を迎えられました。こうして選ばれた皆さんは、自ら研鑽に励み、地域、そして我が国の発展を担う人財として立派に成長し、社会に貢献することが期待されています。

本学は、平成2年に、日本海側で初の工学系の大学として創設され、人間性豊かで創造力を備え、社会に貢献する人財を育成し、また学術と産業との有機的連携を進め、もって地域及び社会の発展に貢献することを目的とし、工学の知識だけでなく、それをを用いる上で必要となる高い知性や人間性を備えた優れた技術者(エンジニア)や研究者(リサーチャー)を育てることを基本的理念としています。

建学以来、富山県の知の拠点となるべく、地域の課題やニーズに的確に応えるとともに、優れて世界的な研究も展開しており、併せて学生の能力を大きく伸ばす行き届いた教育を行っています。こうしたことにより本学が「地域に貢献する大学」や「就職に強い大学」として高い評価を受けていることは、皆さんよくご存知のことと思います。

その後、平成27年4月の公立大学法人化に伴い、県内産業への人材供給と若者の定着に貢献し、一層魅力ある大学となるよう、平成28年4月には、機械システム工学科と知能デザイン工学科の2学科で、定員を10名ずつ増やしました。

昨年4月には、情報システム工学科と環境工学科の2学科について、名称をそれぞれ電子・情報工学科と環境・社会基盤工学科に変更するとともに定員増を行いました。また、工学部では全国初となる医薬品工学科(定員35名)を新設し、これらにより入学定員を平成二十七年度に比べて100名増やし、330名といたしました。

こうした定員増に対応するため、新校舎を建設しており、学部の皆さんが3年生となる、平成32年4月から供用開始することとしています。

また、平成31年度には看護学部を創設することとしており、富山県立大学は地域の知の拠点として、ますます発展していきます。

この拡充計画は、石井富山県知事はじめ県関係者、県議会並びに県民の皆様の温かいご支援のおかげです。

このような皆さんの努力に応えるため、本学では、数々の行き届いた教育を実践しています。

例えば、1年次の対話型の教養ゼミに始まり、4年次の卒業研究に至るまで、すべての学年で少人数の学生と教員とが触れ合う場を用意しています。さらに、全学年を通して、環境リテラシーを育む環境教育プログラム、そして学生の自立を促すキャリア教育を実施しています。

また、本学では、『工学心』で地域とつながる『地域協働型大学』の構築を目指し、地域産業の振興や超高齢化社会への対応などの課題について、企業や自治体など地域の方々と連携し、学生が自ら主体性をもって具体的な課題を見出し、その解決に向けて努力するという授業に取り組んでいます。

このような場や体系化されたプログラムにより、専門知識だけでなく、それを活用するのに必要となる広い視野やコミュニケーション能力、正解のない問題に取り組んで行く力と使命感などが養われるものと考えています。

そこで、このような期待に応えるために、皆さんにお願いをしたいことがあります。

まず、学部の新入生の皆さんにお話しします。

皆さんは、優れたエンジニア、あるいはリサーチャーになることを志して本学に入学されたことと思います。その初心を決して忘れないでください。

その志の実現のために、これから、勉学に励むこととなりますが、覚えておいてほしいことがあります。

まず、第一は、毎日の学習という一步一步の絶ゆまぬ努力が必要だということです。大学では、「試験前の一夜漬け」などは通用しません。実際、国が定める大学設置基準では、皆さんが、一科目の単位を修得するためには、実際の講義時間に加え、その二倍の時間に相当する自宅等での関連学習が必要であるとされていることを覚えておいてください。

こうした地道な努力により、講義の狙いを的確に把握し、体系的にものごとを捉え、より具体的な課題を認識することができるようになり、また、その過程で獲得された知識が集積され、さらに、クリティカル・シンキング(critical thinking＝批判的思考)する力が養われると思います。

次に、私が特に強調したいのは、コミュニケーション力の大事さです。

経団連の 新卒採用に関するアンケート調査では、重要視する項目として「コミュニケーション力」が13年連続で第1位となっています。そのあとは、「主体性」、「チャレンジ精神」、「協調性」となっています。

皆さんは、日頃、Line、Facebook や Instagram など家族や友達とコミュニケーションをとりあっていると思います。

しかし、そういうコミュニケーションとは、一線を画し、産業界は実用的なコミュニケーション力を要求しています。営業でいえば、商品の価格交渉など相手との駆け引きが重要です。

技術系では、私の個人的な見解ですが、例えば、職場で上司から「この仕事をしなさい」とかなり難しい命題を与えられた場合に、それをそのまま受け止めてしまうと、「できません」という答になってしまいがちです。しかし、自分なりに上司の指示をブレイクスルーして、「10割は無理ですが7割ならできそうです。いかがでしょう。」というように、実行を伴う相手との駆け引きをコミュニケーション力とっているような気がします。

これはかなり難しいハードルで、一朝一夕にはできません。ではどうしたらいいでしょう。

私は、皆さんが学生時代にこのコミュニケーション力を養う方法として、質問力を高めることがあると思います。

本学の講義や外部講師による講演会で、是非、質問をしてほしいと思います。質問でなくても、「自分はこう思った」というコメントでも上出来です。

特に、講義では、皆さんが質問するというのが、「相手の言っていることを深く理解し、自分の問題として受け止めているのだ」という合図になります。実は、先生たちは、講義をしても、皆さんが「本当に理解しているのか、していないのか、試験をするまでわからないことが多いのです。しかし、学生の質問を聞けば、先生には、皆さんの理解度が透けて見えます。良い質問をすると、それを聞いた先生は「学生はここがわかっていなかったのか」と理解でき、次回から講義内容をより、リファインできます。お互いがウイン・ウインの関係になるとき、私は、コミュニケーション力が高いと言えると思います。

次に、大学院生の皆さんにお話しします。

教員には、院生をできるだけ、国内学会はもとより、国際学会で発表させるようお願いしています。そして、欧米の学会と日本の学会にも参加する経験ができると思います。

そこで、たぶん、感じると思いますが、日本人は質問を重要視していないように思われます。欧米の学会と日本の学会では、質問に関しては、欧米のほうが、質量ともに充実している印象を持っています。

また、質問でなくても、自分の意見をコメントとして述べることもあります。コメントは義務であると欧米人は言います。何でも聞いたり、見たりしたときは、それに対して何らかの印象や感想を言葉にして返す義務があるというのです。確かに、そう考えることでコメント力またはコミュニケーション力は磨かれると思います。

学会参加という体験を通して、コミュニケーション力とより高い国際感覚を身に付けるチャンスです。皆さんには、このような絶好の機会を逃さないようにしていただきたいと思っています。

さらに、院生諸君は、ほとんどの方が、本学で学部生活を送ってこられたと思います。どうか、学部新入生、そして在学生の模範となるような学習・研究態度で、キャンパス内をリードしていただきたいと思っています。

そして、皆さん全員にお話しします。

かつて、わが国は、世界に誇る高度な科学・技術立国として発展しましたが、大変残念なことに、最近20年間については、「失われた20年」といった言われ方も聞かれます。事実、技術開発を他国に譲ることが多くなっています。しかし、我が国には、まだまだ底力があると思います。我が国が、新しい時代の技術立国として名を馳せることは可能だと思っています。

そのためには、何よりも新しい技術の創造に熱意を持つ皆さんのような多くの若者の力が必要となります。皆さんには、本学において「好奇心」を持って勉学に励み、社会に貢献できるエンジニアやリサーチャーとして立派に成長し、その一翼を担っていただきたいと強く願います。

皆さんの前途にはたくさんのやりがいのある仕事が待っています。皆さんの将来には明るいものがあります。

初心を忘れず、将来優れたエンジニアやリサーチャーとして社会に積極的に貢献するという夢や志を持って、これからの大学生活を有意義に送られることを、心から祈念し、式辞といたします。

平成30年4月5日

富山県立大学 学長 石塚 勝